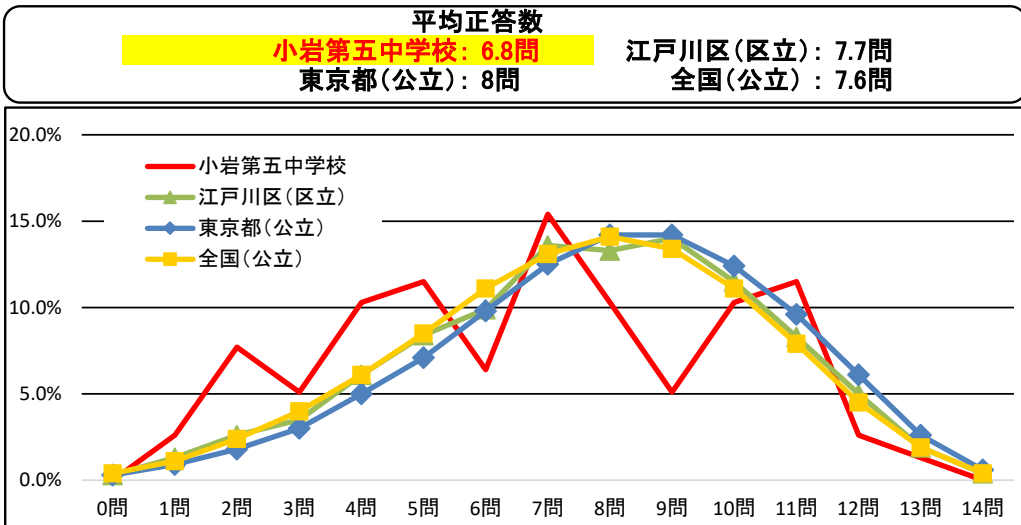


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【国語】江戸川区立小岩第五中学校

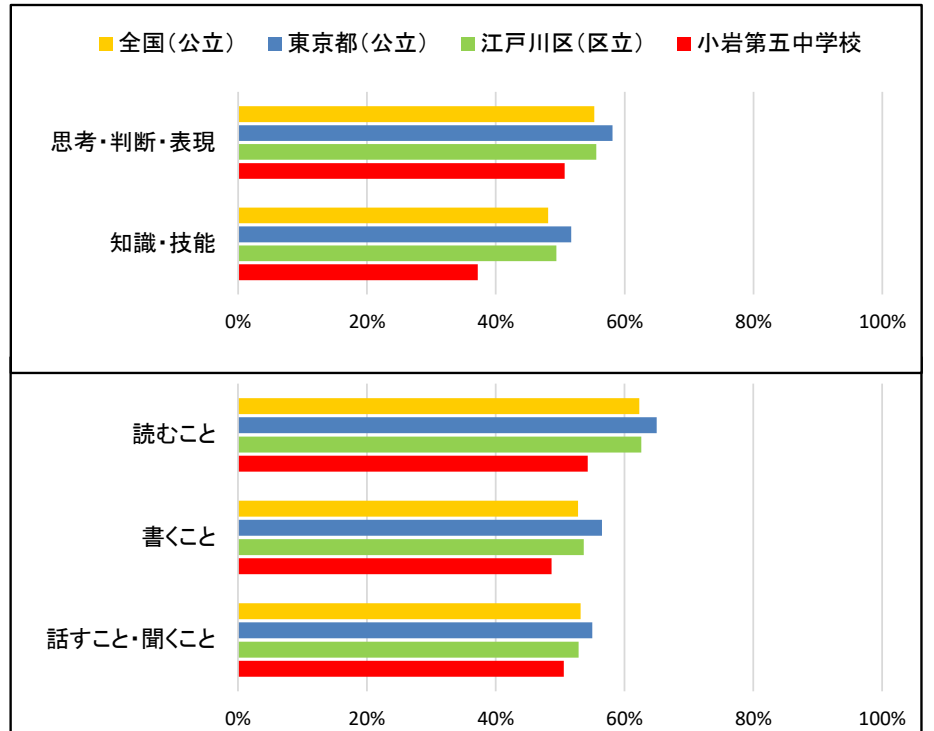
正 答 数 分 布



【平均正答率の差】

小岩第五中学校	49%
江戸川区(区立)	55%
東京都(公立)	57%
全国(公立)	54.3%
都との差(ポイント)	-8.0

「領域別」の結果

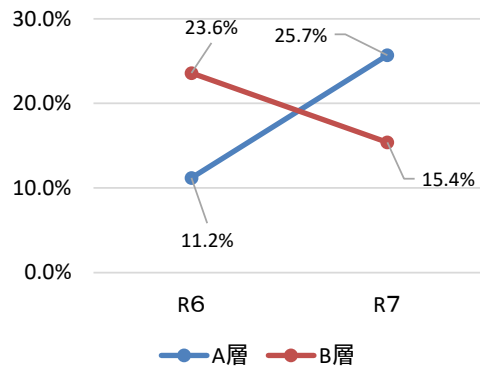


四分位における割合（都全体の四分位による）

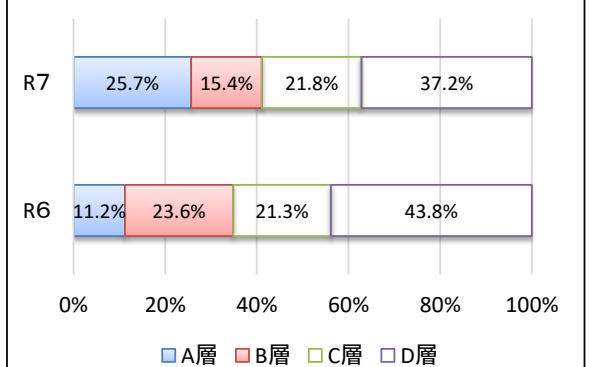
国 語	上位 ←		→ 下位	
	A層 10～14問	B層 8～9問	C層 6～7問	D層 0～5問
小岩第五中学校	25.7%	15.4%	21.8%	37.2%
江戸川区(区立)	27.1%	27.2%	23.5%	22.2%
東京都(公立)	31.2%	28.4%	22.3%	18.1%
全国(公立)	25.8%	27.5%	24.2%	22.5%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、生徒数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の生徒の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。

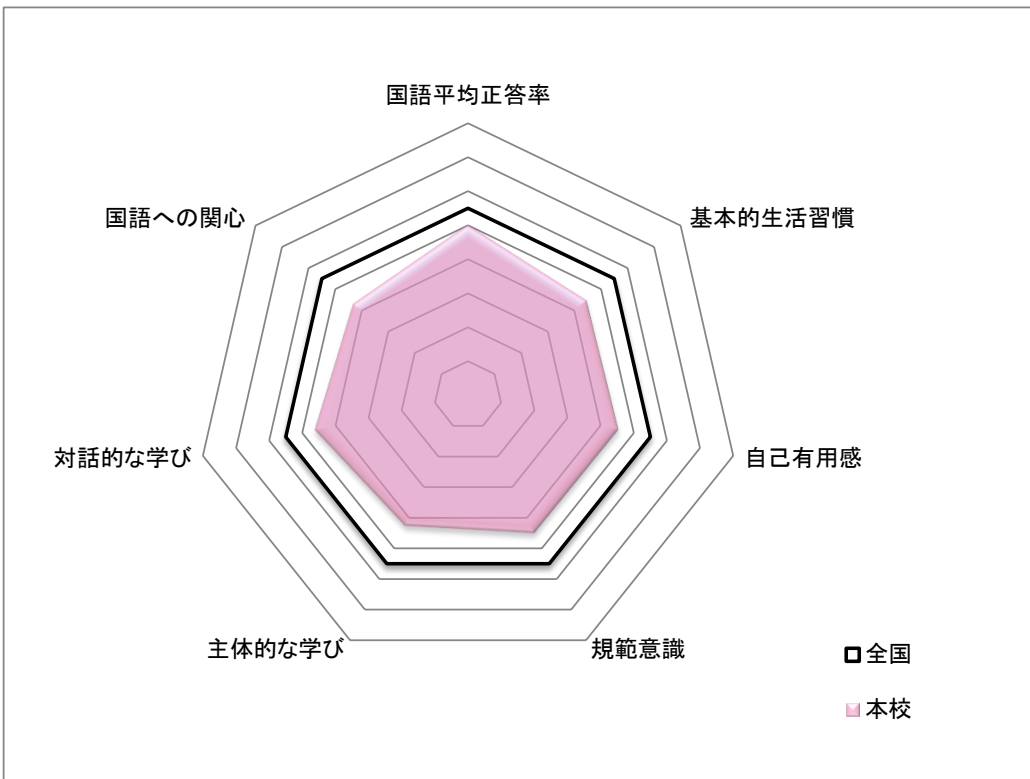
AB層割合の推移



AB層割合の前年度比



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

平均正答率は49%と全国を大きく下回り、D層が37.2%に達する深刻な実態である。特に、「知識・技能」が37.2%と極めて低く、「思考・判断・表現」に影響している。語彙等の基礎不足が、記述力(22.1%)の弱さや思考の言語化を阻害している。また、この「言葉の力の欠如」は、「主体的な学び」や「自己有用感」の低迷と強く連動している。読み書きへの根深い苦手意識が自信をなくさせ、学習意欲そのものを停滞させている現状を直視する必要がある。

《家庭・地域への働きかけ》

国語では「知識・技能」が37.2%と低迷しており、語彙等の基礎定着が急務である。学校は基礎教材やリストを家庭へ提供し、毎日短時間でも復習する習慣作りを強く促す。また、正答率の低い記述問題(22.1%)に対し、その評価基準を保護者へ明確に伝える。点数のみならず、「伝わる文章」を書こうとする生徒の努力を認め、記述への苦手意識を和らげ、家庭と連携して表現力を育てていく。

《現状把握》

平均正答率は49%で、都平均を8.0ポイント下回る厳しい結果である。都との差は層別構成に顕著で、AB層は41.1%にとどまり、特に中堅上位であるB層が都の約半数しかない点が深刻である。対照的にD層は37.2%と、都の2倍以上に達しており、学力の二極化以前に下位層への偏りが激しい。領域別では「知識・技能」が37.2%と低迷し、最重要課題となっている。また、漢字修正の正答率(41.0%)の低さは、知識の定着不足だけではなく、丁寧な見直しや自己管理、計画的な学習リズムがいまだ生徒に浸透していないという、生活全般の不安定さが心配される。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

都平均を下回る「思考・判断・表現」領域の強化に焦点を当てる。説明が多くなってしまいう講義形式ではなく、「考えたい課題」の設定により生徒の関心を高める主体的・対話的学びを推進する。特に記述指導では、根拠を明確化する演習を重ね、論理的表現力を徹底して養う。また、授業内で細やかな目標を設定し、達成感を積み重ねさせることで自己有用感を高める。主体的に学ぶ姿勢を定着させ、上位層の厚みを増す指導体制をめざしていく。

・基礎学力の保障

D層が37.2%に達する現状、基礎学力の保障が要である。知識・技能の定着については低正答率の漢字や語彙に対し、反復学習と小テストを徹底し、読解・記述の実践で使えるレベルへ引き上げる。記述力の強化では高い無解答率の克服に向け、「考えたい課題」で思考を促す。小さな成功体験を積み重ねて自己有用感を回復させ、主体的な学びを土台から再構築していく。

・学習習慣の確立

学習習慣の確立は、都平均を大きく下回る「知識・技能」領域(37.2%)の定着から始まる。語彙や漢字の反復を日常化し、基礎を徹底して固める。併せて、記述式の高い無解答率(正答率22.1%)を克服するために、論理的な文章表現のトレーニングを定期的な習慣とする。日々の学習に小さな目標達成の場を意図的に組み込み、「できた」という実感を積み重ねさせることで、主体的に学び続ける姿勢を生徒に定着させる。

・AB層の育成

上位層育成には、都平均との差が顕著な「思考・判断・表現」領域の強化にある。このため、教員主導の講義型授業から、生徒が「考えたい課題」を設定するなど知的探究心を刺激する授業改善を推進する。特に記述問題では、文章構成や表現効果を深く考察し、根拠を明確にして論述する演習を徹底して行う。論理的思考力と表現力を高め、自ら課題に向き合う主体的な姿勢を養うことで上位層の割合を都水準へ引き上げ、層の厚みを確実に増やしていく。